

★本解説における「接続語」とは、「関係を表す言葉」という意味で用いている。品詞分類における「接続詞」よりも広い意味。また、仮定条件などの助詞の働きは因果関係に含めている。

01 「同等関係」整理問題

① 〈具体〉りんご、ぶどう、バナナ、キウイ

← などといった……抽象化の文中接続語

〈抽象〉フルーツ

② 〈抽象〉単位

← たとえば……具体化の文頭接続語

〈具体〉メートル、リットル、グラム

◆ポイント……接続語をもとに、具体・抽象の関係(同等関係)を判断する。

02 「同等関係」整理問題

① 〈具体〉横にスライドさせてみたら

← 抽象化

〈抽象〉動かす方向を変えたら

② 〈具体〉分かります

← 抽象化

〈抽象〉理解はできる

◆ポイント……言いかえるべきパーツを限定してから抽象化する。②の「合意」は

「賛成」とほぼ同じ意味になってしまうので不可。

03 「対比関係」整理問題

アメリカの国土の面積は / 日本の二五倍 以上ある

人口は / 二・五倍程度である。

対比関係の文中接続語

◆ポイント……「AはAだが、イはB」の型(対比関係の基本形)。Aと対比されて

いるのはイ、Aと対比されているのはB。

04 「因果関係」整理問題

A 雲が日を隠す

← と ……因果関係の文中接続語

イ 部屋の中が暗くなった 部屋に差し込む光が減った

← それで ……因果関係の文頭接続語

ウ 消えていないライトが残っていることに気づいた

◆ポイント……選択肢2「雲が日を隠したから」は、右図「A」を説明したにすぎ

ない。「ア+イ」の意味を持つ選択肢4「太陽が雲に隠され、部屋に差し込む光が

減ったから」のほうが、相対的に理由としてふさわしい。

05 「同等関係」「対比関係」整理問題

「うわー、もうダメかも」……「悲観的」と抽象化できる

「震度4くらい、無視、無視」……「楽観的」と抽象化できる

「今の地震は横浜で震度4でした」……「客観的」と抽象化できる

「今の地震はけっこう大きかったよ」……「主観的」と抽象化できる

◆ポイント……「苦楽」と考えると「苦観的」などとしてしまうので注意。

06 「対比関係」整理問題

A 山梨県は／海に接していないが、
山口県は／海に接している。 対比の観点の統一 OK
パーツの数のバランス OK

B 山梨県は／海に接していないが、
山口県は／海に接しており、 島も含まれる。
パーツの数のバランスが悪い

C 山梨県は／山が多いが、
山口県は／海に接している。 対比の観点が不統一

分類

C……1 野球では 攻めと守りを繰り返しながら試合を行うが、

サッカーでは 攻める役割と守る役割をはっきり分けて試合を行うわけではない。

A……2 野球では 攻める役割と守る役割がはっきりと分かれているが、

サッカーでは 攻める役割と守る役割がはっきりと分かれていない。

B……3 野球では 攻める役割と守る役割がはっきりと分かれており、

攻めと守りを交互に入れ替えながら試合を行うが、

サッカーでは 攻める役割と守る役割がはっきりと分かれていない。

◆ポイント……対比関係を整えるには、

① 対比のバランス（パーツの数のバランス、および抽象度のバランス）

② 対比の観点の統一

を意識する必要がある（鉄則7）。

☆ 鉄則とは、『国語読解22の鉄則』（福嶋隆史著・大和出版）の内容（以降同じ）。

07 「同等関係」整理問題

動植物の生態について調べる

調べることと自然に親しむことは同じではない。

〔具体〕森に分け入って昆虫を探す／湖で手漕ぎボートに乗る／

テントを張って川原で一泊する

〔具体〕川や海で泳ぐ、林の木々を拾い集めて火を起こす、広い草原を駆け回って遊ぶ

などというような……抽象化の文中接続語

〔抽象〕自然に親しむ機会／五感を刺激する機会／文明生活を離れる機会

日常から遠ざかる機会

非日常から遠ざかる機会

◆ポイント……「都会に住んでいる子どもたちであっても」というのもヒントになる。都会と文明の類似性、都会と自然の対比性などを考えると分かりやすい。

08 「因果関係」整理問題

① 正答パターンは左図のとおり（空欄2に入れる形）。

ア 失敗する

← だから ……因果関係の文頭接続語

イ 次は失敗しないようにしようと思う

← だから

ウ 失敗の原因を探り対策を練るようになる

← だから

エ 失敗の確率が減る

← だから

オ 成功する

② 正答パターンは左図のとおり（空欄4に入れる形）。

ア 成功する

← だから

イ 次も成功するイメージがわき、油断が生じる

← だから

ウ 成功の要因を冷静に考えるには至らない

← だから

エ 次に成功する確率は高まらない

← だから

オ 失敗する

予想される誤答パターンは、左図のとおり（空欄5に入れる形）。

ア 成功する

← だから

イ 成功の要因を冷静に考えるには至らない

← だから

ウ 次も成功するイメージがわき、油断が生じる

← だから

エ 次に成功する確率は高まらない

← だから

オ 失敗する

◆ポイント……正答パターンの図でイの要素がないと、「成功するから冷静に考えなくなる」という因果関係になってしまう。このままでは飛躍が大きい。プラス要素（成功する）とマイナス要素（冷静に考えなくなる）とが直結しているのが、

飛躍を感じる一因。誤答パターンでは、このアとイの飛躍が放置されると同時に、イとウの結びつきの違和感も残る。イとウも先ほどと同様、マイナス要素（冷静に考えない）とプラス要素（次の成功のイメージがわく）が直結することになっているのが、違和感の一因。因果関係においては、プラス・マイナスが直結することは少ないと考える必要がある。なお、「成功の要因を冷静に考えるには至らない」という部分が、「成功の要因を楽観的に考えるようになる」と書かれていれば、誤答パターンもだいぶ説得力が増すが、両者は似て非なる表現であり、区別する必要がある。

第1回 国語技能検定 バージョン1・5 解答(1)

08	5点×2	①	(2)	②	(4)
07	4点×2	①	(2)	②	(3)
06	7点		(2)		()
05	4点(完答)×2	③	(1)	④	(4)
04	6点	①	(3)	②	(2)
03	4点×2		(4)		()
02	4点×2	①	(4)	②	(1)
01	3点×2	①	(3)	②	(2)